

研究お助けサロンの活動報告と今後の課題

楠元裕佳¹⁾, 宮蘭幸江¹⁾, 中尾優子²⁾, 兒玉慎平³⁾, 折田美千代¹⁾, 井上尚美²⁾, 根路銘安仁²⁾,
前野さとみ¹⁾, 市村カツ子¹⁾

要旨

鹿児島大学病院看護部と鹿児島大学医学部保健学科と連携し、「研究お助けサロン」という研究プロセスの初段階に特化した研究支援を開始した。研究お助けサロンは研究テーマを明確にし、研究の進め方などに悩む看護職員にとって大学教員に気軽に助言を得られる場となっており、利用ニーズが高く、殆どの相談者は次の段階に進むことができていた。しかし、研究活動には様々な困難さがあり、研究活動を中止する相談者もいることから、次の段階である研究支援者が研究計画書作成、または研究発表まで関わる「看護研究支援システム」の利用につなげ、支援を継続することが必要である。また、研究活動が短期間であることが考えられるため、時間的余裕をもって質の高い研究ができるような取り組みの必要性が示唆された。そして、看護管理者がお助けサロンに参加することは、研究の知識や指導の実際を学ぶことや助言を踏まえた継続支援に活かされることが期待できる。

キーワード：看護研究, 研究支援, ユニフィケーション, 看護職員

はじめに

国内の看護研究においては、日本看護協会より2003年に看護者の倫理綱領¹⁾、2004年に看護研究における倫理指針²⁾の公表がされ、看護系の学会発表に関しても倫理審査委員会の承認を得た研究であることや、倫理的配慮がなされているかなど、倫理的配慮に基づく責任ある行動が求められるようになった。これらの背景を受けて、鹿児島大学病院看護部（以下、看護部）においても看護部倫理審査委員会を設置し、平成19年（2007年）には研究の質を高め、より良い看護実践に寄与することを目的に鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻（以下、保健学科）の教員の協力を得て、看護研究支援システムという研究支援を開始した。この看護研究支援システムは、研究支援者となる保健学科教員、または看護部の研究指導が可能な看護職員が共同研究者として発表までの過程に関わる、または、アドバイザーとして研究計画書の作成までの過程に関わる研究支援である。この研究支援の利

用申請は10件／年以上あり、研究支援を受けた看護職員は、研究支援者より指導・助言を受けながら安心して研究活動を進め、学会や研究会等で発表することができている。

このように、看護研究支援システムは効果的な研究支援であるが、研究支援を申請する段階での研究の進捗状況が私的疑問の段階である者から、研究計画書作成後の実施前の段階で研究方法に困難を感じて依頼する者など幅広かった。発表予定まで期間が短い依頼もあり、研究の進捗状況によっては、研究支援者の負担になることが懸念されたため、研究支援体制の見直しが必要とされた。そこで、あらたに研究目的や研究の方向性を明確にしていく段階での研究支援システムを設け、それ以降の段階での研究支援を看護研究支援システムとし、段階を分けて研究支援体制を整えることになった。また、保健学科教員においては共同研究による研究フィールドの拡大や研究支援による教員の研究能力のスキルアップをは

¹⁾ 鹿児島大学病院看護部

²⁾ 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻 成育看護学講座

³⁾ 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻 地域包括看護学講座

連絡先：楠元裕佳

鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘8丁目35番1号 鹿児島大学病院看護部

TEL: 099-275-5111, Fax: 099-275-6507

E-mail: kyoiku4@m3.kufm.kagoshima-u.ac.jp

かりたいという意向が一致し、これから研究を始めようとする看護職員を対象に保健学科教員の助言を受けられる研究支援として、平成28年5月より「研究お助けサロン（以下、お助けサロン）」が開始となった。

看護系大学と臨床による看護研究支援についての報告は、高村ら³⁾の年間を通して看護研究研修と実践、個別指導を行った受講生のその後の変化を調査したものや、鬼頭ら⁴⁾の病棟毎に教員が年5回の個別指導を実施し、看護研究のサポートを行っていた看護師長の困難さの変化を調査したものがあ。しかし、お助けサロンのような研究プロセスの初段階に特化した研究支援を行っている取り組みの報告はみられなかった。

本稿では、お助けサロンに関わる活動記録や相談者の反応等を基に、お助けサロンの活動を報告し、今後の課題について考察する。

看護研究支援体制の概要

お助けサロンが開始になったのを受け、平成28年9月に研究プロセスに沿って研究支援体制を表した看護部看護研究の支援システムのフロー図が作成された（図1）。保健学科と看護部と連携による研究支援体制としては、「お助けサロン」と「看護研究支援システム」の2つがある。まず、「お助けサロン」の対象は、原則、私的疑問はあるが、研究目的が明確にできておらず、文献検索の段階にある看護職員を対象にしている。もう一つは、前述した「看護研究支援システム」で、ある程度研究計画書を作成した段階で臨床研究倫理審査受審前から研究支援者より支援を受ける体制とした。どちらも支援を希望する看護職員による申請が必要である。

また、鹿児島大学病院臨床研究倫理委員会の下部組織として看護部臨床研究倫理審査委員会があり、お助けサロンとは異なるメンバーの保健学科教員2名と看護部5名の委員で構成され、倫理審査を実施している。

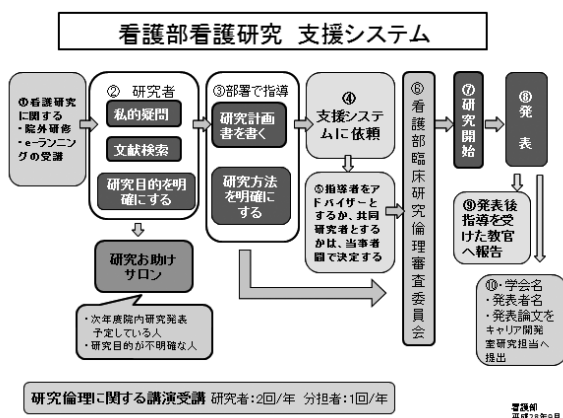


図1 看護研究支援システムのフロー図

お助けサロンの概要

1. 活動目的

鹿児島大学病院看護師の看護研究に関する取り組みと能力の向上

2. メンバー構成と役割

- ・保健学科メンバー4名：相談対応者。相談者の困っていること、知りたいことなどの相談に対応する。
- ・看護部メンバー3名：必要時、相談対応者の回答に対して臨床側の視点から補足するなどして、相談者の理解が深まり、解決に繋がるよう支援する。

3. 運営方法

1) 開催日程：原則、第2木曜日の17時開催

2) 開催案内から開催までの流れ：

- ①おおよそ開催1ヶ月前に、院内職員向けメールサービスを使用し、全看護職員宛にお助けサロン開催の案内を行う。相談を希望する看護職員は相談内容を看護部メンバーに知らせる。
- ②看護部メンバーと保健学科メンバーで相談件数と相談内容について共有し、当日の相談対応者や時間配分など調整する。
- ③看護部メンバーより、相談者へ相談開始予定時間・会場の連絡をする（1件あたり約30分）。

お助けサロンの状況

1. 相談件数

年度別のお助けサロンの相談件数（図2）は、各年度ともに、約30件あった。但し、平成30年度は11月までの状況であるが、すでに、相談件数は30件であり、過去2年とほぼ同数の相談件数に達していた。

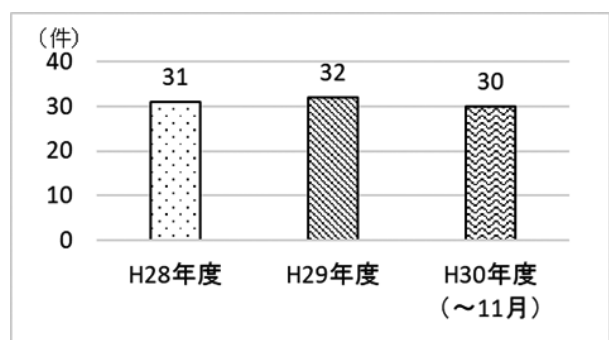


図2 お助けサロン利用件数

月別の相談件数（図3）をみると、平成28,29年度は6月に相談件数が集中する傾向にあり、6月～8月にかけて4件/月以上の利用があった。その後の相談件数は徐々に減少する傾向があった。しかし、平成30年は2月

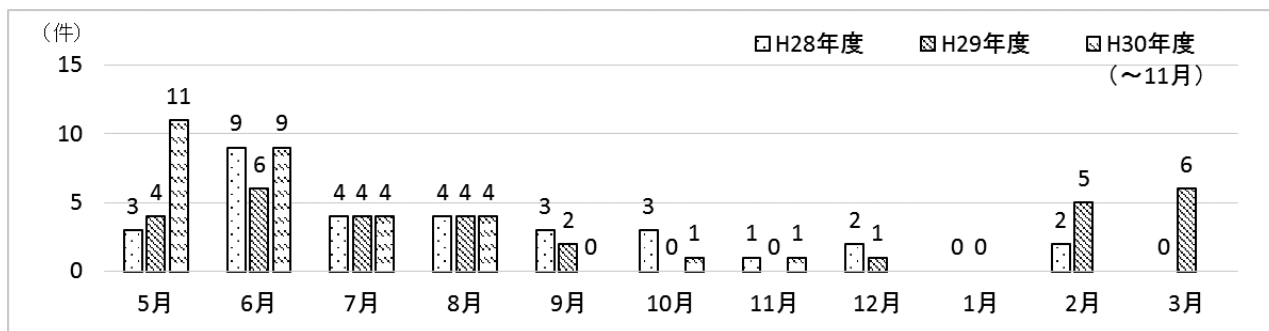


図3 月別お助けサロンの利用件数

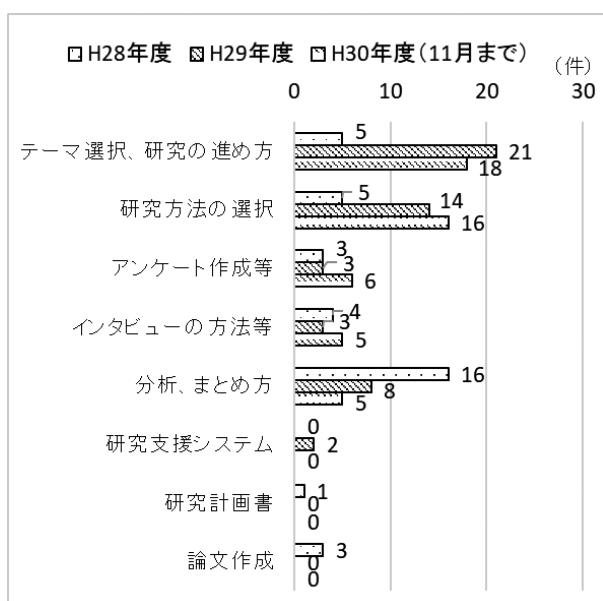


図4 お助けサロン相談内容

から4件以上の相談があり、5月は過去最も多い11件、6月も9件と相談件数が増加した。9月の相談件数は0件であったが、その後の相談件数は少ないものの、ほぼ毎月利用されている状況にあった。そして、ほぼ全部署の看護職員がお助けサロンを利用しており、1年に7件利用する部署もあった。

2. 相談内容

1) 相談内容の分類方法

お助けサロンの相談内容は、相談者が申請時に記述した相談内容を読み取り、研究プロセスの段階または、最も質問内容を示すのに適した表現に分類した(図4)。「考えている研究テーマ・目的は妥当か」、「研究として成り立つか」、「研究目的を明らかにするには、どのような研究方法が適しているか」など研究目的や研究の方向性に関する相談を【テーマ選択・研究の進め方】とした。

また、「○○を対象に質問紙での調査研究を考えているが、妥当であるか」のように、研究テーマ・目的に対して、予定している研究方法が妥当かどうかについての相談は【研究方法の選択】とし、質問紙調査の対象や質問項目、スケールなどの相談を【アンケート作成等】、インタビューの仕方や質問内容、インタビューガイドの作成についての相談を【インタビューの方法等】とした。データの検定方法やカテゴリ分類の方法、まとめ方などを【分析・まとめ方】、研究支援システムの利用に関する内容は【研究支援システム】、研究計画書の書き方の相談は【研究計画書】、論文の形式やまとめ方に関する相談は【論文作成】とした。1件の相談に複数の相談内容が含まれる場合は、それぞれ該当する内容に分類した。

2) 相談内容の実際

相談者の相談内容で最も多い内容は平成28年度が【分析、まとめ方】の16件であり、平成29年度は【テーマ選択・研究の進め方】の21件、平成30年度は11月までの状況で【テーマ選択・研究の進め方】の18件であった。次に多い相談内容は、すべての年度で実施しようとしている研究方法是妥当であるかという【研究方法の選択】の相談であった。相談件数に差はあるものの、研究プロセスの各段階に関連した質問があった。

3. お助けサロン利用後の研究倫理審査受審状況

平成30年度のお助けサロンの相談者の殆どは、研究活動中であることが想定されるため、平成28年度と平成29年度の相談者を対象にお助けサロン利用後の状況について報告する。

平成28年度は相談者31名中15名(48.4%)が研究倫理審査受審前の利用であったが、看護部看護研究の支援システムのフロー図(図1)を看護職員に提示された後の平成29年度では32名中30名(93.8%)となった(図5)。研究倫理審査受審前にお助けサロンを利用した相談者の

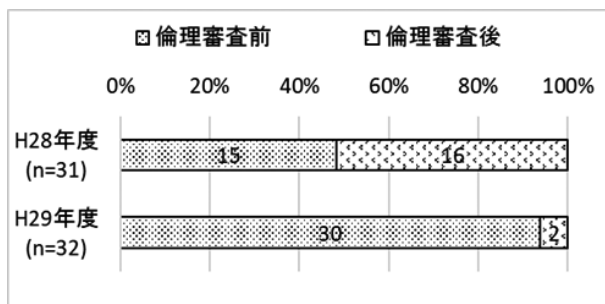


図5 お助けサロン利用時の研究倫理審査受審の状況

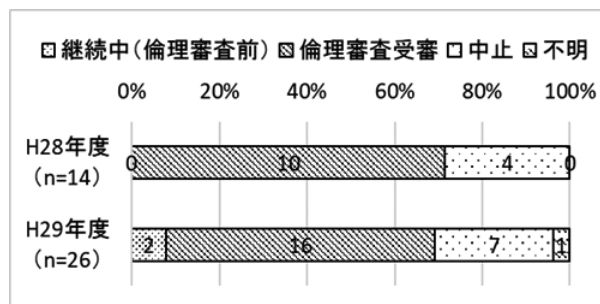


図6 お助けサロン利用後の研究倫理審査受審状況

うち平成28年度が1名、平成29年度は4名がお助けサロンを再度利用していた。お助けサロンを研究倫理審査前に利用した相談者の利用後の研究倫理審査受審の状況(図6)をみると、平成28年度は相談者の10名(71.4%)が研究倫理審査を受審しており、その内1名はお助けサロンを再度利用してからの受審であった。そして、平成29年度は相談者16名(61.5%)が研究倫理審査を受審しており、その内3名がお助けサロンを再度利用してからの受審であった。

お助けサロンを利用後、研究倫理審査を受審する前に研究を中止した者は、平成28年度4人(28.6%)、平成29年度は7名(26.9%)であり、平成29年度の7名中1名はお助けサロンを再度利用した後、研究を中止していた。中止に至ったのは、「メンバーの異動や退職により、研究継続が難しくなった」の理由が多く、その他、「症例数が少なく、研究協力の同意を得るのが難しい」等の理由であった。

4. 院内研究発表の発表演題のお助けサロンの利用の有無

看護部主催の院内看護研究発表の発表者ら研究メンバーのお助けサロンの利用状況を図7に示す。院内研究発表前にお助けサロンを利用している割合は平成28、29年度が約50%であり、平成30年度は20演題中15演題(75%)が利用していた。また、お助けサロンを利用した時期は、その発表年度に入ってから利用が殆どであった。

5. 管理者のお助けサロン参加

平成28年度より自部署での研究指導に活かしてもらうことを目的に、管理者の参加を推奨していたが、参加は少ない状況であった。そのため、平成29年度は、看護部の教育委員(師長・副師長)を対象に1人1回、お助けサロン開催日に自部署の相談を問わず、指導見学するよう企画し、15人の参加があった。指導見学に参加した管理者からは、「役に立った」との反応はあったが、具体

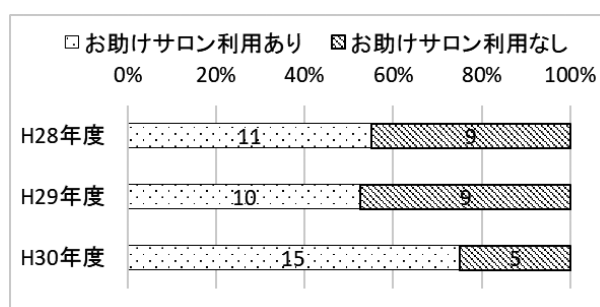


図7 院内研究発表者のお助けサロン利用状況

的にどのように自部署の研究指導に活かされたかは不明であった。そこで、平成30年度はお助けサロンの相談件数が多い9月までの時期を強化して、自部署の看護職員がお助けサロンを利用する際の参加を、管理者(特に教育委員)へ依頼した。その結果、平成30年11月までの延べ人数は管理者31名と前年の2倍を超える参加となっている。部署別のお助けサロンの利用件数と管理者の参加状況は、図8に示す。部署によっては、自部署の相談に師長・副師長一緒に参加することもあった。10月以降のお助けサロン利用についても、相談者とともに部署の管理者の参加がみられていた。

6. お助けサロンの相談対応および運営側からみた相談者らの状況

お助けサロンを利用するにあたって、相談依頼者の他、共同研究者・部署の管理者の参加を勧めており、1件あたり4人程度の参加があった。相談者らの状況は30分程度という時間を設けていることもあるが、相談したいことを書き留めたノートや研究テーマに関連した文献、データ、作成途中の研究計画書などを持ち寄り、積極的に質問し、メモをとる行動がみられていた。また、相談者の中には、「研究の方向性を整理したら、また、相談に来ていいですか」との発言もあり、気兼ねなく保健学科教員に相談できる関係、環境ができていたりことやお助けサロンという場のニーズの高さが伺えていた。

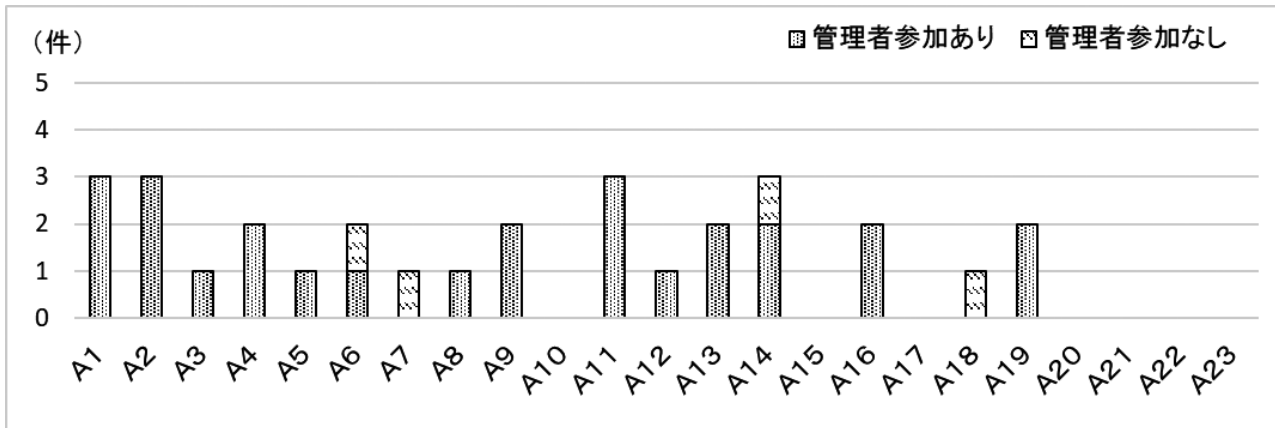


図8 部署別お助けサロンの利用件数と管理者の参加状況
* A1～A23は部署（病棟・外来・中央診療部門等）を示す

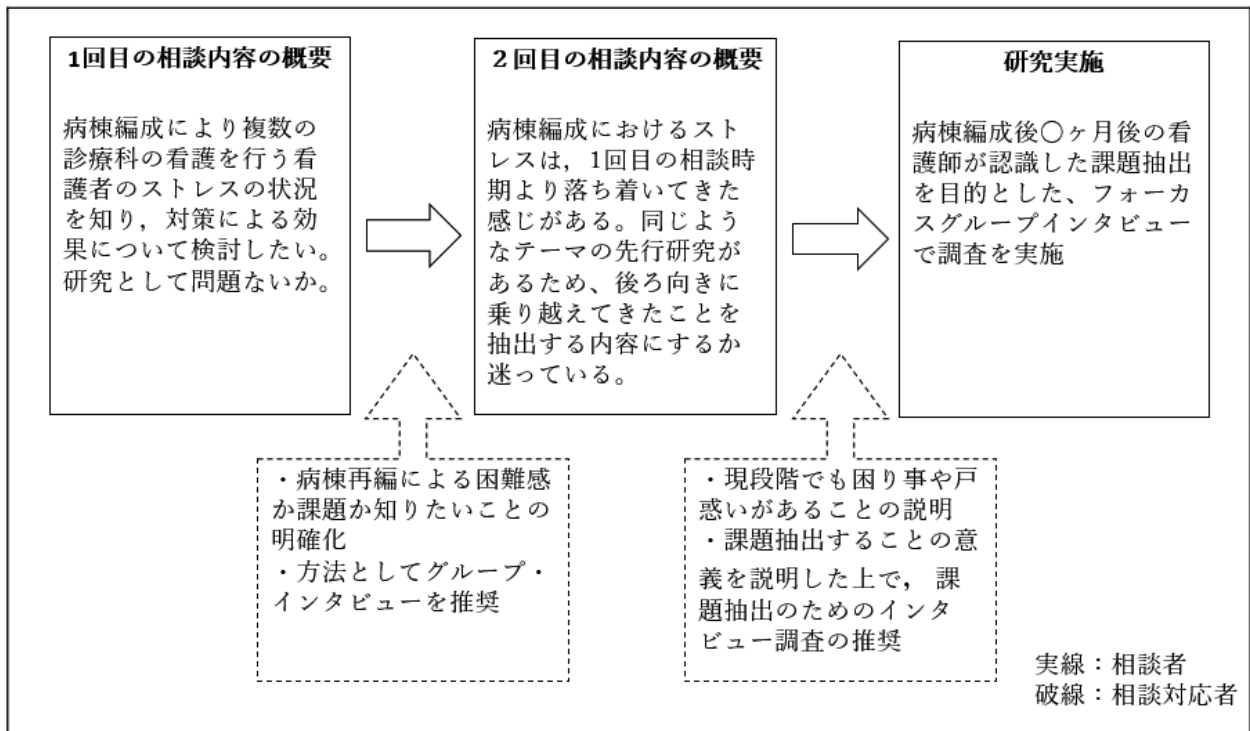


図9 お助けサロンの相談者と相談対応者との関わり

そして、助言を受けた直後、「やっぱり、対象は〇〇に絞った方がよさそうだね」「一番知りたいことは△△だよ」など、相談者らの中で確認する様子があり、漠然としていた研究の方向性を絞り、次の段階に研究を進めていくことの一助となっている様子があった。

次に、お助けサロンを2回利用して研究目的や研究方法を明確にし、研究を実施できた相談者の一例を紹介する(図9)。1回目お助けサロンを利用した際の相談者は病棟編成により複数の診療科の看護を行う看護者のス

トレスを知り、対策による効果について検討したいと思っており、研究として問題ないかとの相談であった。それに対し、相談対応者は相談者の動機や現状、想定される結果など思いや考えなどを引き出した後、病棟再編による困難感か課題か知りたいことを明確にすること、方法としてグループ・インタビューで行ってはどうかと助言を行った。数カ月後に2回目のお助けサロンの利用があり、相談者からは現時点では病棟編成におけるストレスは1回目の相談した時より落ち着いてきた感じがあ

ること、先行文献を検索するといくつか同じようなテーマの研究が実施されていたことの発言があった。そして、後ろ向きに病棟編成のストレスを乗り越えてきたことを抽出する研究を行うか迷っているとの報告があった。相談対応者は相談者から現状や思いなどを聞き出し、病棟編成を終えたこの時期においても困り事や戸惑いがあることが考えられるとの話を行った。そして、課題抽出することの意義について説明し、課題抽出に向けたインタビューで調査を実施する方向で助言がされた。インタビュー方法についてもインタビューする際の自発的な発話を目指す環境づくりやインタビュー練習の必要性、インタビュー後の確認作業など細やかな助言があった。最終的に、相談者は相談対応者の助言で示された方向性で研究を実施し、研究発表に至ることができた。このように、相談者は相談対応者からの研究的視点から助言を受け、研究の方向性を絞れることで、研究プロセスを進めることができている。

更に、お助けサロンの相談者より「指導をきっかけに、自分達が研究で明らかにしたいことが少しずつ明確になった」と、この研究プロセスの初段階での関わりの必要性を感じる感想も得られた。

平成30年度のお助けサロンでは管理者の参加が増えているが、管理者も分からないことや気になったことの質問があり、相談者が現状を伝えきれないところの補足を行うなどの様子が見られ、同じ相談者という立場で助言を理解しようとしている側面と、上司として相談者が助言を深く理解できるよう努めている側面が見受けられた。

お助けサロン後、相談対応者からは相談者の疑問に対して「興味深い研究に繋がるものであった」、「今回の研究で明らかにしたことを、今度はこの方向性で研究を行うと、同じテーマで研究を発展させて行える」などの意見があり、相談対応者側の研究的視点が拡がり、臨床には多くの研究フィールドが潜んでいることが分かったとの意見が聞かれていた。

考察

1. お助けサロンの利用の現状と課題

年度毎のお助けサロンの相談件数をみると、平成30年度は途中経過ながら30件の利用があり、毎年30件以上と定着してきている。また、部署別の利用件数を見ると、ほぼ全部署で利用されており、1年で7件利用した部署もあった。また、お助けサロンで助言を受けた相談者が、部署で検討した結果を持って再度相談依頼利用する者もみられている。お助けサロンの利用状況から、毎月のお助けサロンの開催案内によるものだけでなく、お助けサロンを利用したことのある看護職員を通して、お助けサ

ロンが研究支援として看護職員に認知されていると推測される。また、相談者らの発言や態度などから、お助けサロンが気兼ねなく相談できる場所であり、研究の知識・経験が豊富な大学教員の助言を得られる場としてニーズが高いことが推察される。

月別の利用件数にみると、5、6月の時期を中心に年度前半の利用が集中し、11月～1月にかけての利用が少ないという傾向があった。4月は管理者を含む看護職員の異動があり、各部署の業務や教育体制など見直しがされる時期である。それに伴い、研究グループの継続や再編成など見直しており、各グループがどの学会、或いは院内の看護研究発表を目指すのか再確認する時期ともなっている。また、鹿児島大学病院では、例年11月に看護研究発表会を開催し、各部署1題ずつ発表をしているが、院内看護研究発表者（共同研究者も含む）の5～7割が、その発表年度にお助けサロンを利用していることから、短期間で研究活動を行っていることが推察された。年度初めの部署の研究グループや活動の確認、見直し等により、5、6月の相談が集中し、院内看護研究発表後の11月～1月の利用件数減少を生じていることが考えられる。このように、お助けサロンの利用が年度初めに集中することや短期間の研究活動が想定される状況に対し、お助けサロン開催案内時には、翌年以降に研究発表を予定している者の参加を勧めることになった。また、部署の教育委員を通して研究の取り組みを早めに行い、単年度にこだわらず時間をかけて研究活動することを推奨している。平成30年になって、相談件数が少ない時期の相談件数が増えたことは、少なからず、これらの働きかけが影響していることが推測される。引き続き、研究発表を予定している看護職員は、時間的余裕を持って質の高い研究ができるよう、研究始動段階を支援するお助けサロンの利用を推奨していく必要がある。

2. 看護研究支援体制におけるお助けサロンの役割

お助けサロンの相談者のほぼ全員が研究倫理審査受審前に利用するようになっており、平成28年9月に看護部看護研究の支援システムのフロー図で示したことで、お助けサロンが研究のどの段階における研究支援であるのか看護職員に認識されるようになったことが推測される。また、平成28年度は【分析、まとめ方】が最も多い相談内容であったが、翌年からの相談内容は、研究に取り組み始めた段階である【テーマの選択、研究の進め方】、次に、研究方法は質と量のどちらが適切か、予定している方法は適切かなど【研究方法の選択】の相談が多くなっている。これらの状況から、お助けサロンは、私的疑問を公的疑問にしていく段階や研究方法を明確にしていく段階に関わる支援ができており、次の段階につ

なげる役割ができていると考えられる。

井上ら⁵⁾は、臨床看護研究に取り組む看護師は【研究テーマの設定が難しい】【文献検索・文献検討の方法が不十分】【看護研究プロセスが分からない】【研究計画書の立案が難しい】【研究結果のまとめ方が難しい】と述べており、研究プロセスのどの段階においても困難を感じ、【研究プロセスが分からない】状況であったと述べている。お助けサロンは研究テーマの設定の段階に関わっているが、文献検討や研究計画書作成など次の段階に困難を感じる事が考えられる。現状として、看護部の臨床研究倫理委員会の委員からは、臨床研究倫理審査の申請に際し、申請用紙の確認指導以前に研究目的と研究方法に一貫性を持たせることや文献検討の不十分さなどが課題としてあがってきている。また、お助けサロン利用後の状況をみると、研究倫理審査受審に至らず、2～3割の研究相談者が研究を中止していた。中止の理由はメンバーの異動や退職などの人員不足を挙げた者が多いが、その背景には研究の知識不足や研究時間の不足などの要因により、研究が進めずにいるまま異動や退職時期を迎えていることも考えられる。看護職員が研究を行っていくためには、研究に必要な知識を深めることや研究時間の確保などの環境を整えると共に、研究指導が可能な者による研究支援が必要と考える。そのため、お助けサロン後の研究活動について困難や不安を感じている看護職員に対しては、研究支援者となる保健学科教員、または看護部の研究指導が可能な看護職員が共同研究者として発表までの過程に関わる、または、アドバイザーとして研究計画書の作成までの過程に関わる看護研究支援システムの利用につなげることも大切である。坂下ら⁶⁾は中・大規模病院に所属する看護研究推進担当者対象の調査より、研究支援上の課題として、データ分析や研究方法に関する知識、院内で研究指導する人材を挙げており、組織外のリソースを活用した研究支援の必要性を述べている。看護職員の研究を行う上での困難さに応じて、お助けサロンから看護研究支援システムの利用につなげることは、更に看護職の研究活動に関した困難さの解決の一助となると言える。

お助けサロンの利用に際して、管理者の参加が増えている。鬼頭ら⁴⁾は、看護師長の院内看護研究を遂行する上での困難感として、【看護研究の専門的知識がなくスタッフに教えることへの不安】【研究を完成させなければならない責任】【研究メンバーに看護研究の時間を確保する困難さ】【看護研究を手伝う時間確保ができない困難さ】などを明らかにしている。看護部においても、平成29年の教育委員会（各部署より選出された管理者から構成された看護職員の教育、キャリアアップ支援を担う委員会）にて、管理者の研究活動推進について協議し

た際に、看護研究を行うにあたっての知識不足や看護研究経験の不足から研究指導に自信がない、研究以外の業務もある中で研究指導の時間をつくるのが難しいなどの意見が聞かれており、看護部の管理者も同じような困難感をもっていることが考えられる。そのため、管理者のお助けサロン参加を推奨することは、相談者と同様に助言を受けて学ぶことだけでなく、研究テーマや方向性を明確にしていくための研究指導者として関わりの実際を学ぶこと、そしてお助けサロンでの助言を踏まえた継続支援にも繋がる機会となり、管理者の支援となることが考えられる。

まとめ

本稿において、お助けサロンは、研究テーマを明確にし、研究の進め方などに悩む看護職員にとって研究の専門的知識や経験のある大学教員に気軽に助言を得られる場となり、殆どの相談者は次の段階に進むことができていた。しかし、研究活動には様々な困難さがあり、研究活動を中止する相談者もいることから、次の段階である研究支援者が研究計画書作成、または研究発表まで関わる「看護研究支援システム」の利用につなげ、支援を継続することが必要である。また、短期間の研究活動で発表していることが考えられるため、時間的余裕をもって質の高い研究ができるような取り組みの必要性が示唆された。そして、看護管理者がお助けサロンに参加することは、研究の知識や指導の実際を学ぶことや助言を踏まえた継続支援に活かされることが期待できる

文献

- 1) 公益社団法人日本看護協会：看護に活かす 基準・指針・ガイドライン集2018、日本看護協会出版会、東京、2018、p72-78
- 2) 前掲書1) p187-202
- 3) 高村佑子、長岡由紀子、脇田泰章、他：大学と付属病院のユニフィケーションによる院内看護研究研修の評価—受講者が自覚する自己の変化と今後の課題、茨城県立病院医学雑誌2017；34（1）：1-10.
- 4) 鬼頭和子、鈴木啓子、平上久美子：院内看護研究活動を支援する師長の困難と大学教員による研究支援後の変化、名桜大学紀要2018；23：33-41.
- 5) 井上知美、中野宏恵、東知宏、他：看護研究における臨床看護師が抱える困難、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要2014；21：23-35.
- 6) 坂下玲子、北島洋子、西平倫子、他：中・大規模病院における看護研究に関する全国調査、日本看護科学会誌2013；33（1）：91-97.

Kenkyu Otasuke Salon (Research Aid Salon) Activities and Future Objectives

Yuka Kusumoto¹⁾, Yukie Miyazono¹⁾, Yuko Nakao²⁾, Sinpei Kodama²⁾, Mitiyo Orita¹⁾, Naomi Inoue²⁾,
Yasuhito Nerome²⁾, Satomi Maeno¹⁾, Katsuko Ichimura¹⁾

1) Nursing Department of Kagoshima University Hospital, Sakuragaoka 8-35-1, Kagoshima, 890-8520 Japan

2) University Faculty of Medicine school of Health Sciences

Address correspondence to: Yuka Kusumoto

E-mail: kyoiku4@m3.kufm.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

The “Kenkyu Otasuke Salon” (Research Aid Salon) specializes in providing support in the initial stage of a research process, and was initiated as a collaborative effort between the Nursing Department of Kagoshima University Hospital and the Kagoshima university Faculty of Medicine school of Health Sciences. The Kenkyu Otasuke Salon has allowed nursing staff facing difficulties identifying the topics of their research to clarify and advance with their research by providing accessible guidance from university instructors. Thus, there is high demand for the salon, which has allowed most users to advance to the next step. However, research activities are characterized by various types of difficulties. Given that a certain number of nurses discontinued their research activities, it is essential for continuous support to be provided to enable users to advance to the next step, that is, the Nursing Research Support System, which provides coaching on writing research proposals and publications. Furthermore, because it is possible that the research activity was short-termed, there is a necessity for attempts to enable nurses to conduct research of high-quality with more time to spare. Participation in the Otasuke Salon by nursing administrators avails to them knowledge about research and allows them to observe how guidance on research is provided, which is expected to be conducive for continued support, including advising on research projects.

Keywords: Nursing research, research support, unification, nursing staff